



緑爽会報 NO. 102  
 '11年10月26日 発行  
 (社)日本山岳会緑爽会  
 TEL 03-3261-4433  
 事務局 松本恒廣 樋口公臣  
 夏原寿一 川口章子  
 近藤 緑 横山 隆 渡部温子

「二〇月例会」 講演と山行の集い

一〇月一五〜一六日、『北八つ彷徨』の山口耀久さんをお招きして甲斐大泉で開催された集会は、好評のうちに終わりました。参加者は、松本恒廣・近藤緑・渡部温子・横山隆・高辻謙輔・山口悠紀子・島田稔・山川陽一・夏原寿一・川口章子・小泉義彦・近藤雅幸／神長幹雄・大沢純二・大沢さな枝・中司恭・中司八重子・池田修平・中村好至恵・鈴木伸介・長沢洋



前列左から近藤(雅)・大沢・島田・山川・渡部・横山 中列大沢夫人・中司夫人・山口(悠)  
 ・中司・川口・山口・近藤・高辻・池田 後列 小泉・中村・神長・長沢・夏原・松本

「北八つ彷徨」の著者を囲んで

近藤 雅幸  
 このところ週末は秋晴れと相場が決まっていたが、その日だけは今にも雨が降りそうな雲行きである。高原のペンション、ロッジ「山旅」には三時過ぎから人が集まり始めた。山口耀久さんが入ってきたのは三時半ごろ。近藤緑さんたちの案内で現れた姿は写真で見たとおりのきりつとした瘦躯だ。

四時。談話室に集まると、山口さんはまるで世間話でもするかのよう自然体のままソファに腰かけて語り始めた。最初は「八ヶ岳とは」がテーマである。「特に準備してこなかったで、ほかのところで話した内容を話します」と断るところが山口さんらしい。

話が終わると質問の時間となる。山口さんはどんな質問にも丁寧に答えてくれる。耳が聞こえづらいこともあって、聞き取れない時はわざわざ質問者のところに来て話を聞く。とても丁寧で律義な人だ。

夕食は鍋、肉料理、そしてロッジ山旅名物の釜めしである。気が付くといつのまにか山口さんは席を立っている。談話室で参加者からのサインの求めに応じていたのだ。手の痛さにもかかわらず、求めに応じる姿には頭が下がる。

夜は山口さんを囲んでさらに話が弾む。山口さんも話を聞く方も夕食前に比べてやや

ラックスした様子である。その中には山の水彩画家、中村好至恵さんの顔も見える。著作にまつわる裏話、尾崎喜八さんの評価についてのコメント、文学論、そしてこれから書きたいもの。話はますます熱を帯び、興味深い話題やエピソードを交えた語りについて引き込まれて知らずには過ぎていく。

中でも週に三〜四回は山の夢を見るという山口さんの話にはとてもかなわないと思った。この人の山に対する気持ちに比べたら、わたしなどは恥ずかしくて「山が好きです」と言えなくなってしまう。いつしか夜は更け、名残を惜しんでお開きになったのは一〇時だった。

(府中市在住・新入会)

飯盛山登山

渡部 温子

明け方まで降っていた雨も止み快晴、登山日和。体が温まる三〇分間はゆっくり歩きますと横山リーダーは言ったけれど、一〇分も登ると息が切れてくる。後から登ってきた若い二人連れにサアーツと追い越され、若き日の自分達の姿に思いを重ね見送る。

視界が開けると飯盛山が見え、頂上には人影もある。三等三角点のある平沢山で休憩をしながら展望を楽しんでいると、後から来たグループにバス二台が到着、団体客が来るとの情報を得て、飯盛山を目指す。急な坂を一気に下り、駆け上がるように登り、飯盛山の頂上に立った。先客は一人。まだ気温が上がっていないのと、風が無いので雲も少なく雨があがりの山々がくつきり見える。

飯盛山は、超展望の山々一〇一選(関東甲信越)の中にもある一つ。私は五回目にして初めて三六〇度の山々を望むことができた。

八ヶ岳、戸隠、妙高、浅間山、金峰山の秩父連峰、富士山、北岳・甲斐駒等の南アルプス、そして木曾駒ヶ岳の中央アルプス、時間を忘れる。



左から夏原・小泉・渡部・横山・島田 撮影・小泉

展望を満喫して記念撮影を終え、一〇時過ぎ下山開始。清里方面に向かう途中も展望は良く、林道で平沢峠に車を取りに行くりーダ―と別れる。途中目黒区の団体四〇名とすれ違ったが、後は会う人も無く、ミズナラやコナラの静かな林を抜けて平沢部落に出た。ここからは味気ない車道を二キロ余り清里駅まで歩く。爽やかな日で、歩くことは苦にならなかつたが、最後まで登り道である。

不要だった防寒具を重荷に感じ始めたころ、横山さんの車が追い付き、ザックは乗せるけど計画通り駅まで歩くと笑顔での敵しい言葉車が通らないのが救いでした。駅が見当たらずウロウロ、まさか見えている白い箱状の建物が駅舎だったとは。羽賀さんの志賀高原ホテルの建物は歴史記念館として残されている

のが救いだった、と記されていた事を突然思い出す。

清里のあまりの変わりように山やが失望しながら、帰りの車窓風景は楽しく、天候や展望に恵まれたことを感謝して山行は終わりました。

「山行参加者」渡部温子・島田稔・夏原寿一・小泉義彦 係り・横山隆 計五名

## ■『北八つ彷徨』の地をめぐる

高辻 謙輔

夜通し降り続いた雨も朝食が終る頃には止んで雲が動き、青空がのぞき始めました。飯盛山に登る人達を見送ったあと、八ヶ岳山麓の散策組はコーヒーをいただいたで一息いれてからロッジ「山旅」を辞し、山と溪谷社の神長さんが運転する車で「日野春アルプ美術館」に向かいました。

ここは斜里町の「北のアルプ美術館」と並んで「アルプ」が語り残した世界を次の世代



前列近藤・中村・山口・鈴木 後列松本・神長・川口・高辻 撮影・長沢

まで、と企図する館として有名です。坂本直行の油絵と水彩画、大谷一良の版画が壁面を飾り、中村好至恵さんの山の絵画が開催されていました。

お昼に立ち寄った所が蜂谷緑さん達にはお馴染みらしい原村のペンション「グリーングラス」。部屋にはグラランドピアノがあって、譜面台にはバツハが。食事はナイフとフォークでおいしくいただきました。オーナーは常田（ときた）啓子さんという、宝塚を退団したばかりのような美しい方。五〇歳でピアノを始め、さらに社会人として唯一人、信州大学大学院で哲学を学ばれたとか。前夜の講師山口耀久さんと意気投合して交わす会話はニーチエ、カント、デカルト……。話に加わる余地は全くございませんでした。

最後に行ったのは厚生連富士見高原病院。ここはかつての富士見高原療養所で、一九五〇（昭和二五）年三月から二年間、山口氏が療養生活を送られ、後に山口夫人となる川上久子さんを知り、また富士見の分水荘に住む尾崎喜八と出会った思い出の地。

『北八つ彷徨』の「富士見高原の思い出」によると、療養所は並行した六つの病棟からなり、それぞれの病棟は傾斜した長い廊下でつながっていました。しかし病院の建物に当時の面影はなく、再訪を楽しみにされていた山口氏はどう思われたでしょうか。それでも建物を木造に置きかえてみると、高原療養所の雰囲気よみがえるような気がしました。

帰りは中央高速道をひた走り、車返団地で山口氏とお別れした後、新宿駅まで送っていただき、散会しました。

（新潟市在住）  
「散策参加者」山口耀久・近藤緑・高辻謙輔・神長幹雄・川口章子 計五名

「日野春アルプ美術館」へは松本恒廣・長沢洋

石原國利・近藤信行対談（その二）

## 井上靖『氷壁』とその時代 の為に

蜂谷 緑

一〇月一九日（水）に石原國利・征子夫妻が、標記の対談の打合せのために、近藤に会いに甲府へ来てくださると連絡があった。FAXによると、二五日に松本に着き、翌日上高地に入り、徳沢から洞沢へ行き、一九日に下山、その足で松本から来甲されること。行程表を見ると、沢田栄介（ナイロンザイル切断事件のパーティの一人）さんや石岡繁雄（故人。墜死した若山五郎の兄で、ナイロンザイルの実験をしてその欠点を実証した）の娘さんも同行している。

ナイロンザイル事件は一九五五（昭和三〇）年に起こっている。もう半世紀以上も昔の話だ。当時、二〇代半ばだった石原さんは、ことし八歳になる。当事者としては、長く十字架を背負った気分だったのではなからうか。「これで洞沢も最後かもしれない」と言い、「それなら私も」と夫人も同行されたのだと言う。

夕刻、甲府駅に到着した石原さんは、長い山旅の後で疲労の色が濃かったが、それでも「もう歩かなくていいのだから」と機嫌よく、私どもと夕食を共にしながら一ヶ月後に迫った対談の進め方について綿密に準備したい様子だった。その日、同席した私は、耳よりな話を一足先に聞くことができたわけだが、それをここに書くわけにはいかない。

新しく求めた新潮文庫『氷壁』のカバーは、昔のままの風見武秀の写真だった。風見さんにとっても忘れ難い作品だったのだろう。今も上高地のビクターセンターには、他の山岳写真家と共に自選の一枚としてこの写真が飾ってある。『あした来る人』と違って『氷壁』は格段に立

〔緑爽会11月例会〕

## 井上靖『氷壁』とその時代

対談 石原國利・近藤信行  
とき 11月19日（土）13:30～  
ところ 日本山岳会104号室  
問合せ・申込みは、松本まで。  
電話&Fax 03-3326-2892

〔緑爽会忘年会〕

とき 12月13日（火）13:00～  
ところ 日本山岳会会議室  
申込みは川口章子まで。  
電話&FAX 047-463-8721



派な山岳小説である。若い石原さんを前にして真剣にノートをとったという作家の姿が目につく。私にとっても、親友の小坂乙彦が死に、魚津太夫がまた死ぬという結末に胸を痛めた昔が懐かしい。結果的に二人の人生を弄んだ美那子という美女に反感さえ抱いたものだ。改めて巻末の佐伯彰一の解説を読むと、作家が女主人公の魔的な面を徹底させなかったことを指摘していて、なんとなく溜飲がさがった。

石原夫人は婚約中に『氷壁』を手渡され「読んでみて欲しい」と言われたそうだが、それを重大な告白とも知らずに「なんで私が読まなきゃいけないの」と思ったとか。登山とは無関係なおっとりした夫人のお陰で、石原さんのその後的人生は、どんなにか怒められたことだろう。〔編集後記〕富士見高原療養所の姿は変わっていたが、取り巻く林には名残が感じられた。山口さんはここでの青春の思い出に浸りたかったに違いない。（文）